



Title	米国に住む「日本人ゲイ」により語られる物語／語りに関する研究：どのように自身の性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性について物語るのか
Author(s)	富安, 皓行
Citation	未来共創. 2021, 8, p. 3-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83894
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

米国に住む「日本人ゲイ」により語られる物語／語りに関する研究

どのように自身の性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性について語るのか

富安 皓行

要旨

本研究は、米国に住む「日本人ゲイ」が性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性という二つのマイノリティ性をどのように経験してきたのかについて記述することを目的とする。本研究は語る内容のみならずどのように物語るかという語り方、すなわち物語／語りのナラティブとしての側面に着目し、カリフォルニア州サンフランシスコ・ベイエリアに住む三名の「日本人ゲイ」の物語／語りを提示・分析する。三名の物語／語りは「オカマ」のような話し方によるいじめについての話や、日本企業の異性愛中心性についての話、日本と米国どちらに住み続けるかについて思案するような話を含んでいる。これらの話は既存の研究の指摘と多分に重なり合う。

ときに「日本人ゲイ」たちの物語／語りは両義性や矛盾を含む。たとえば一方で人種的・民族的マイノリティ性をもつ性的マイノリティが向き合う差別について語りながらも他方で自身の「成功」について示すことや、「悲惨」なものとして語りうる物語をさまざまな工夫を通して「悲惨」な物語として語らないことなどの例がみられる。本研究はこれらの物語／語りのもつ意味や役割について考察した。

目次

1. 問題の設定
 - 1.1 背景と問いの設定
 - 1.2 調査対象の設定
2. 「日本人ゲイ」の物語／語り
 - 2.1 シンヤの物語／語り
 - 2.2 ユウの物語／語り
 - 2.3 ヒロシの物語／語り
3. 物語／語りの分析
 - 3.1 物語／語りにみられる規範
 - 3.2 「ズラシ」と「外し」
4. 本研究のまとめと限界

キーワード

ゲイ
在米日本人
物語／語り
マイノリティ

1. 問題の設定

1.1 背景と問いの設定

近年の性的マイノリティを対象とした研究は、性的マイノリティ性をもつ者たちのあいだの「差異」に着目する。日本の社会学者・クィア研究者である森山至貴は、クィア研究のもつ視座について「差異に基づく連帯の志向」、「否定的な価値づけの積極的な引き受けによる価値転倒」、「アイデンティティの両義性や流動性に対する着目」と説明している。森山は、クィア研究は「差異に基づく連帯の志向」について「多様なセクシュアルマイノリティを、それらの差異を隠蔽することなく関連付けて考察すること」をめざすと述べている（森山 2017: 125-128）。

森山の述べるような性的マイノリティたちのあいだの「差異」は、さまざまな社会的要素によって作り出されている。たとえばゲイとレズビアンは性的マイノリティとしてまとめられるものの、それぞれが直面する課題や困難はジェンダーに基づき異なる様相を取るだろう。また「差異」の問題はゲイやレズビアン、バイセクシュアルやトランスジェンダーというカテゴリー間の問題だけに留まらない。社会的背景の違いや「能力差」、障害のあるなしなどは、たとえばゲイというカテゴリー内のそれぞれの人びとの営む生を異なるものとするだろう。クィア研究の中には性的マイノリティ性とその他のマイノリティ性という二つ以上のマイノリティ性に着目しながら、彼らが生きていくなかで経験する複合的な社会的抑圧について描きだそうとする研究群がある。

米国に住む「日本人ゲイ」は、性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性という二つのマイノリティ性を抱える存在だといえるだろう。クィア理論家のジュディス・バトラーがフェミニズム運動における前提となる一枚岩の女性という主体の存在について批判したように（バトラー 1999）、ゲイ解放活動の中で語られてきた一枚岩のゲイという主体も、それが白人中心によるものだとして批判の対象となっている。人種的・民族的マイノリティ性を有した性的マイノリティが直面する特有の課題や他者からのイメージについて多くの研究が指摘している（Eguchi 2011; 2014; Han 2015; Han et al 2014; Hanafusa 2020; Strayhorn & Tillman-Kelly 2013; Sueyoshi 2016 など）。

それでは米国に住む「日本人ゲイ」に着目した研究は、これまでどのような点に着目しどのようなことを明らかにしてきたのだろうか。社会学者のタマガワ（2020）は日本から米国、カナダ、オーストラリアに移動した経験をもつ55名の性的マイノリティに対して調査を行った。うち19名が米国への滞在経験を有していた。この調査は彼らの性的難民性を明らかにした。回答者は一方で日本でのいじめ経験や日本社会における性的マイノリティに対する無理解を語り、もう一方で海外のLGBTQに対する寛容さについて回答している。しかし性的マイノリティたちが渡航後直面する海外における人種・民族的問題や移住に関する問題、文化や言語の違い、健康保険に関する問題などの存在も明らかになった（Tamagawa 2020）。

社会学者のヒラノ（2014）による研究も、タマガワの研究同様、日本から海外に移動するゲイたちの経験を明らかにした。ヒラノは14名のインタビューと2つの「在米日本人ゲイ」による手記の分析を通して、日本から米国へと移動した者たちの来米の動機や米国での生活の様相を明らかにした。ヒラノの研究においても日本社会の異性愛規範は問題となる。「結婚や子どもを生み育てることなどの日本の規範にためらいなくフィットできないゲイにとって、移住は代替の生き方を確保するための資源として機能」し、「日本人のセクザイルにとって、セクシュアリティは、キャリアや英語運用能力の獲得、文化的露出の期待を増やすことなど他の重要な要素と結びついている。これらの要素が移動を促進する。キャリアの見通し、ゲイ・アイデンティティ、経済的資源の結びつきの中で、日本人ゲイ男性は日本から離れるか、日本に住み続けるのか、米国（またはカナダのいくつかの市）に住み続けるか日本に戻るかを交渉する」という（Hirano 2014: 93-94）。

以上の先行研究は性的マイノリティ性による日本社会での困難や、人種・民族的マイノリティ性による米国社会での困難に直面しながら生活する「日本人ゲイ」に関する物語の存在、ないし経験を明らかにしてきたといえるだろう。先行研究はこの点で評価できる。なぜならば物語を明らかにし語ることは社会変容のために大きな力をもつからである。この点を指摘したのは社会学者でありゲイ・スタディーズに大きな影響を与えたケン・ブラマーである。ブラマーは近年米国において性に関わる物語が盛んに語られるようになっている

ことに着目し、物語／語りのもつ政治的な力について述べている。プラマーは「セクシュアル・ストーリーは権力の流れのなかにいきる」という。ストーリーは語ることによって想起される感情と結びつきながら、社会を変容させる力となる(プラマー 1998: 51-62)。すなわち以上に挙げた先行研究は、研究を通して日本の異性愛中心性や米国ゲイ社会の白人中心性を指摘することによって社会変容を目指す一つの政治的な試みでもあった、といえるだろう。

しかしながら先行研究は、米国に住む「日本人ゲイ」の物語／語りの存在、ないし経験について比較的画一的な捉え方をしてきた、とも指摘できるだろう。日本の異性愛中心性や米国における白人中心性はもちろん批判されるべき対象である。しかし米国に住む「日本人ゲイ」たちが、いつもみずからの性的マイノリティ性と民族的マイノリティ性を強調するような物語を語るとは考えづらい。むしろ彼らは自身の物語について語る際、自らのマイノリティ性を強調するような物語／語りや、自らのマイノリティ性を否定するような物語／語りや、その両方を自覚的・無自覚的に混ぜながら物語るのではないだろうか。この揺れ動きを捉えることこそが、彼らの性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性についてよりよく理解することにつながるのではないだろうか。

本研究は、米国に住む「日本人ゲイ」が性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性をどのように経験してきたのかについて記述し明らかにすることを目的とする。本研究は語りのナラティブとしての側面に着目し、語りの内容と、語り方双方を分析の対象とする。その物語や物語を語ることは語る者にとってどのような意味をもっているのだろうか。

本研究は以上をリサーチクエストとし、以下で「日本人ゲイ」たちの来米と米国での暮らしに関する物語／語りを記述していく。次節では本研究における研究対象を提示する。第二章では三名の「日本人ゲイ」の物語／語りを提示する。三名の物語／語りは、「日本人ゲイ」たちが直面するさまざまな課題を含んでおり、またその物語の語りには特徴がみられる。その点に焦点を当てながら提示する。第三章では三名の物語／語りを分析・考察する。まず先行研究にみられたような日本における異性愛中心性や「日本人ゲイ」たちの米国での人種・民族に基づく周縁性が語られているかという点を検証する。

その後、三名の物語／語りにみられる自身の表象の揺れ動きに着目し分析を行う。第四章では本論文の限界を指摘しまとめとする。

1.2 調査対象の設定

本研究の調査対象は、米国カリフォルニア州サンフランシスコ周辺地域(以後サンフランシスコ・ベイエリア)に居住する「日本人ゲイ」たちによる性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性に関する物語／語りである。本研究の調査対象の選定理由は、サンフランシスコ・ベイエリアが歴史的・地理的に「日本人ゲイ」による物語／語りを収集するための適切な場所であることによる。

サンフランシスコ市は米国西海岸にあり、日本の福島市とほぼ同じ緯度に位置する人口約88万人の都市である。サンフランシスコ市は長らく米国西海岸の経済・物流において重要な場所であり、近年は多くの情報通信技術関連企業の本拠地となっている。その結果近年地価の高騰が問題となり¹、多くの住民は郊外へと移住している。この現象は昔からのサンフランシスコ市、サンフランシスコ近郊の市をまとめたサンフランシスコ・ベイエリア(またはベイエリア)という枠組みをより強めている。

サンフランシスコ・ベイエリアの特徴は住民の人種・民族的多様性にある。サンフランシスコ・ベイエリア全体の統計をみつけることはできなかったものの、サンフランシスコ市の人種割合は2019年の調査において白人が46.4%、ヒスパニック・ラティーノではない白人が40.5%、アジア人²が34.4%、ヒスパニック・ラティーノが15.2%、黒人およびアフリカンアメリカンが5.2%、二つ以上の人種的ルーツをもつ人が5.6%、ネイティブハワイアンもしくは他の太平洋の諸島地域が0.4%、のように続いている³(United State Census Bureau 2019a)。サンフランシスコ・ベイエリアの一角となるオークランド市の人種割合は、白人が35.5%、ヒスパニック・ラティーノではない白人が28.3%、ヒスパニック・ラティーノが27.0%、黒人およびアフリカンアメリカンが23.8%、アジア人が15.5%、二つ以上の人種的ルーツをもつ人が6.9%、ネイティブハワイアンもしくは他の太平洋の諸島地域が0.9%と続く(United State Census Bureau 2019b)。この地域は多くの雑誌や本で人種・民族的多様

性を顕現する場所として表象される。しかし現実には異なる人種間でのヘイト・クライムもしばしば報告されている。

サンフランシスコ・ベイエリアは日本にルーツをもつ人びとが多く集まる地域でもある。サンフランシスコ市はジャパントウンを有する。ジャパントウンは日系企業の運営する書店や、日本の食材を多く取り扱うスーパー、日本食レストラン、土産物屋、100円均一の店などを有し、「日本人」・日系人を主なサービス対象者とするシニアセンターや寺院も存在する。例年4月には祭りが開催され盛況を呈する。ジャパントウンはしばしば日本の旅行者から「本当の」日本でないと評されることもあるものの、その存在は日本から離れた者たちにとって日本とのつながりを感じさせる場所となっている。

サンフランシスコ市は1960年代から本格的に始まったゲイ権利獲得運動の中心地の一つとなった。現在でも市内カストロ地区には多くのゲイバーが存在し、ゲイたちが性的な出会いを求め集うゲイサウナも存在する。「ゲイ・ニュースペーパー」と呼ばれる週刊新聞は、ゲイが多く参加したイベントの報告や、LGBTQをテーマにした映画や本の紹介、ゲイの活動家や有名人のインタビュー記事や、イベントやサービスの広告などを掲載している。多くのゲイ支援団体は、それぞれHIV／エイズに関する問題、雇用問題、高齢者問題、若者の問題など幅広い問題に対する情報やサービスの提供を行っている。しかしながら人種・民族的マイノリティのゲイたちが周縁化されていると指摘されてもいる。人種・民族的マイノリティのゲイたちは、自らが団体やサービス・サークル等を立ち上げ活動している⁴。

私は2018年10月～12月、2019年11月～2020年3月までの約8ヶ月を中心にサンフランシスコ・ベイエリアへと複数回赴き、現地に住む「日本人ゲイ」8名にインタビューを行った。インタビュー協力者の年齢は30代が1名、50代が3名、60代が4名だった。8名中7名は結婚経験があり、うち2名はパートナーと死別し現在一人暮らしだった。

インタビュー協力者を募る方法は、インターネットの情報、人からの紹介などである。私はゲイと自認しており、滞在中にゲイたちが利用するスマートフォンのアプリケーションを利用し知り合った一人の「日本人ゲイ」と交友をもった。また私はインターネットを通じてサンフランシスコに居住する一

人の「日本人ゲイ」の存在を知り、その人にメールでコンタクトをとった。両名は自身もインタビュー対象者となり、さらに「日本人ゲイ」の幾人かと「日本人ゲイ」たちが集まる会合を紹介してくれ、そのつながりを基にインタビュー協力者を募った。

私は飲食店やインタビュー協力者の自宅などで、一人につき最低一回から複数回のインタビューを行った。インタビューは非定型的なインタビューとなったが、生まれてから現在までにおこった出来事について語ってもらうよう促した。インタビュー協力者と共に散歩することや飲食を行うこと、会合への参加も行い、そこでおこった出来事についても記録するよう心がけた。インタビューは可能な限り録音し、録音できない場面ではフィールドノートを取るようにした。なお本研究は、大阪大学大学院人間科学研究科・共生学系研究倫理審査で承認済みの「ゲイと『老い』に関する民族誌的研究」で実施したインタビューとフィールドノートの一部を分析したものである。

この章のしめくくりとして、本研究における「在米日本人ゲイ」の定義を示したい。本研究における「在米日本人ゲイ」の定義は「日本に長く住んでいた経験をもち、現在米国に住んでいるゲイ」という緩やかなものである。なぜならば「日本人」という概念が非常にあいまいなものだからである。

2. 「日本人ゲイ」の物語／語り

本章では本研究で行ったインタビューとフィールドワークを基に、シンヤ、ユウ、ヒロシ（名前はそれぞれ仮名である）という三名の物語／語りを順に提示する。

2.1 シンヤの物語／語り

はじめに提示するのはシンヤの物語／語りである。シンヤの物語／語りは、先行文献がこれまで指摘してきたような日本の異性愛中心性と来米後の日本と米国のはざまに立つ「日本人ゲイ」の物語／語りの代表例となる。シンヤの物語／語りにみられる学生時代の経験や、日本に対する複雑な思いに着目しながら以下の文章を読んでほしい。

シンヤは50代のゲイである。彼は20代に米に渡り、以来米国に住み続けてきた。私とシンヤとの出会いは、私がサンフランシスコ・ベイエリアでの本格的な研究開始前にサンフランシスコに滞在した際の個人的なものであった。私はのちにサンフランシスコ・ベイエリアに住む「日本人ゲイ」に対しても本格的にインタビューすることに決め彼にインタビューを頼んだ。今回提示する物語／語りはこれまでの彼とのやり取りをまとめたフィールドノートを参照している。

シンヤは他のインタビュー協力者と二つの点で異なっていた。この二つの相違点が彼の物語／語りに特色を与えていたように考えられた。

一つ目の相違点は、シンヤが私に対してしばしば批判的な態度を取ったことだった。例えば私は一度日本の俳優のように整った彼の容姿について褒め、羨ましがったことがあった。しかし彼は私のことばについて、米国人は目鼻立ちのはっきりしたアジア人のことを好きではないといって否定した。彼は私の研究に対しても批判したことがある。ある時彼は、私の研究場所の選定について次のように批判した。

君はサンフランシスコで研究しているの。何かここじゃないといけない理由があるわけ〔私に尋ねるように〕。止めた方がいいよ。他のところで研究した方がいいよ。トロントとかボストンとか、オーストラリアとかでもいいじゃない〔論ずるように〕。家賃が高すぎるよ。

彼のアドバイスは確かに私にとって的を射ていた。家賃が世界的にみて高いサンフランシスコ・ベイエリアで生活するのは、私にとって容易いことではなかった。彼は長年米国で生きてきたことに対して強いプライドをもっているようにみえた。シンヤの私に対する批判はサンフランシスコ・ベイエリアにきたばかりの「新参者」である私に対してのアドバイスであるようだった。

しかしシンヤが私に対して批判的なアドバイスをする理由は他にもあるように考えられた。それはどうやら私が研究後に日本に帰る人間であることに関連しているようだった。彼は私と話をするときしばしば日本に戻りたいという旨の語りを行った。ある日彼から聞いた語りが彼の来米理由を説明して

いるように考えられた。この日のフィールドノートを以下に提示する。

「子どもの頃はどんな子どもだったんですか」。私はシンヤに尋ねた。シンヤは「それっていつ頃」と私に聞き返した。私は「10代とか」と返答した。シンヤは語った。

「すごい神経質な子だったね。あのね。小学生の時に僕の推薦した男の子が立候補して生徒会長になったの。そしてすごく活発だったの。でもね、中学生の時にある一人の女の子にその活発な姿を馬鹿にされたのね。そして高校生の時にアイツのしゃべり方は『オカマ』だっていわれて話せなくなったの。アメリカに来て30年経って、だいぶ昔の自分を取り戻したけどね」。

私は「内向的になったんですね」といった。シンヤはいった。「でも僕は、性格検査をしてもすごくめずらしくて、はっきりした結果が出ないんだ。それにその質問の意図がわかってしまうから、あえて自分と反対な答えを選んだりしてる。何回か心理カウンセリングにいったけど、並みのカウンセラーじゃ僕の相手はできないよ。だってカウンセラーよりわかってしまうんだもん。何人かすごい人がいたけどね。逆にこっちがカウンセリングをするくらいだもん」。

「でももう疲れちゃった。うん。実は父が認知症になってね。それで最後は看てあげたいと思ってる。それにね。うちは家族みんな知ってるんだ〔シンヤの家族はシンヤのセクシュアリティについて知っている〕。だからアメリカにいない必要がないんだよね」。

私はいった。「確かに帰っても理解してくれる人がいるわけですよね。」「もちろん周りの友だちは、アメリカと日本をいったり来たりする人もいるよ。でもお金ないし、車も売り払ったし、なによりシングルだしね。他の人たちにはアメリカ人のパートナーがいるからね。後悔するかなって思うんだ。でも後悔っていう経験をしにいくんだ。しない後悔よりずっといいでしょ〔私に尋ねるように〕」。

シンヤは日本に対しての複雑な思いを私に語った。私は、日本に帰った

いと何度も語りながら、なかなか踏み出さない彼に対して苛立っていてもいた。しかし同時に私は日本と米国のはざまで揺れる彼に対して強く共感していてもいた。彼の日本に対する複雑な心持ちは、私の彼に対する印象に「投影」されたようだった。

上記の「シングル」「パートナー」ということばのように、シンヤは私にしばしば恋愛の話を語り、しばしばそれを日本への帰国希望の理由に位置付けた。今回インタビューをした8名のゲイの中で結婚経験のない独身者はシンヤのみだった。この点が彼の他のインタビュー協力者と異なる点の二点目だった。恋愛についての話は今回他のインタビュー協力者によってしばしば語られた話でもあった。

シンヤは他のインタビュー協力者同様恋愛を試みたが、文化の相違によりうまくいかなかったといった。彼は「日本人ゲイ」の恋愛相手を探したが、恋愛はなかなか上手くいかないといった。彼はある時「オープンリレーションシップ」という関係の様式を批判した。米国に住むゲイたちの中には、特定のパートナー以外のゲイと性的な行為を楽しむ者もいると彼は語り、その関係について以下のように批判した。

「オープンリレーションシップ」のずるいなんて思うのは、自分の欲しいものは全部欲しいんですよ。でしょ〔尋ねるように〕。僕はアメリカ人の彼氏がいるけど、若い子が彼氏としてほしいから若い子と付き合う。オープンで。ずるいじゃないですか。だってさ。一夫多妻制なんてさ。もう結婚も認められたんだから、それに対して「オープンリレーションシップ」ってことをゲイだけが許されるってそんなのおかしいよ。

「オープンリレーションシップ」は日本に住むゲイにもみられる。しかし彼にとって「オープンリレーションシップ」は、米国におけるゲイたちの関係の様式の代表として捉えているようだった。

2.2 ユウの物語／語り

次にユウの物語／語りを提示する。ユウの物語／語りの特徴は、インタ

ビューを通してユウが私に対して自身をどのような存在として物語るか、どのような存在として立ち振る舞うかについて両義性をもっていることにある。その両義性に着目しながらユウの物語／語りを読み進めてほしい。

ユウは60代のゲイだった。彼は小柄な身体に丸眼鏡をかけていた。彼はいつもバリトンの声でゆったりと明瞭に私に話しかけた。彼の声や彼の立ち振る舞いはいつも「大人な」落ち着きを醸し出しているようにみえた。確かに彼はフィールドワーク中に私が知り合った人たちの中で、一位二位を争うほど頭脳明晰で教養に富んでいた。彼の頭脳明晰さは教育・キャリア歴からも伺えた。彼は日本で有数の男子校出身で有名な国立大学を卒業し、東京の企業への就職ののち、カリフォルニア支店への転属をきっかけとして来米したのだった。

ユウと私の出会いは、私と何人かの「日本人ゲイ」との会食を通じた集団インタビューの際に訪れた。私はその後ユウに対して個人インタビューを頼んだ。ユウは私を彼の自宅に招待した。その家は「豪邸」だった。ユウは最初に来た客人に対していつもそうするように自宅を案内した。玄関をくぐるとそこにはリビングルーム、ダイニングルーム、書斎が60畳は下らないのではないかというほどの空間で続いていた。その家はもともとエンジニアで建築士をしていた男性の持ち家だったそうだ。

ユウが私を自身の自宅に招待する理由として、80代後半のジャックという白人パートナーの存在があった。ジャックは非常に穏やかで理知的な人だったが、年齢による身体的な衰えには勝てないようだった。ジャックはインタビュー中、私たちの声が聞こえているのか聞こえていないのかくらいの距離で、掃除や片付けなどの作業を黙々としていた。この個人インタビューでユウから聞くことになった物語の一つが、ジャックとの結婚の物語だった。ユウはアジア系のゲイたちが集まる団体への参加を通してジャックと知り合ったと語った。彼はインタビューで結婚式の直前の様子についてまるで昔を懐かしむように私に物語ってくれた。

高校生の〔米国留学中〕ときにホストペアレントだった親がいるわけですよ。親にカミングアウトしてて、ジャックとかにも紹介しててすごく親

しくしてたんだけど、その親に結婚することにしたって電話したんですよ。何日に結婚するよって。そう、よかったわねっていつてくれて。そうしたらね。結婚の前日かな、当日かな、にお花のアレンジメントが届いたの。お祝いについて。で、そのお花をボタンホールにさして式に臨んだの。

ユウは高校時代に留学経験があった。その経験で培った自身の英語力を生かして、大学時代は新宿二丁目で外国人とよく交流していたとも語った。

インタビューを終えると、ユウは私に世界各国の料理を振る舞ってくれた。私は彼の作った料理とジャックの選んだワインに舌鼓を打ちながら、彼による料理の材料や調理方法、料理の歴史についての解説を聞くのだった。彼は食材や調理方法はその国の歴史や社会や文化を映し出すと私に語った。

以上のようなユウの一側面のみを切り取れば、ユウは米国で「成功」した「日本人ゲイ」となるだろう。しかしながら彼は私に「日本人ゲイ」の差別にまつわる歴史についてよく語った人物でもあった。

ユウが私に対して教えてくれたことばの一つとして「ゲイ難民 (gay refugee)」があった。彼はある時、自身が関わっている月一回のホームレスに対する食事提供ボランティアについて語った。「ボランティアで興味深かったことの一つに、ホームレスの子どもたちのLGBTQの比率がとても高いこと。おそらくそのホームレスの団体に関わっている子どもたちの4割くらいがLGBTQだと思う」。

その時一緒にいた他の「日本人ゲイ」による「まるで『ゲイ難民』みたいです」という感想にユウは頷き、私に「ゲイ難民」ということばの意味を説明してくれた。それはもともと住んでいた国や地域の異性愛中心的な社会規範に迎合することができず、他の国や地域に渡った／らざるをえなかった人びとという意味だった。彼は以下のように語った。

とりあえずサンフランシスコに来ればなんとかなると思って多くの子どもたちが集まってくる。この前Facebookでみたんだけどね。一人の子どもがカミングアウトしたら、親が高校を卒業したら家から出ていけと

いったそうだよ。その家族はカリフォルニア州の決して田舎に住んでいないわけではないんだ。このご時世になってもそういう人がいる。

その話を聞いた後日行ったインタビューで、彼は自身の「ゲイ難民」性について語ってくれた。それは彼が日本の銀行に勤めていた時代の「職場の付き合い」に関する話だった。

就職した時は1978年。その時にそういう企業に入ったわけですよ。そして同じ部署にタイに駐在員でいっていた方がいらっちゃって。「タイなんていいですよ」って「ユウが」いったら、「日系企業ってご接待とか多いんですよ」って。「接待いくとまず女性のいるところについて、その日の連れになる女性を選ぶんだよ。で、その女性をそれぞれ連れてゴルフについて、ゴルフをしてお食事をして、その後はそこに戻ってその女の方と楽しんで「性的な接待を受けて」終わるんだよ」って。私はそれを聞いた時「お客さんの前で僕ちょっとそういうのやりたくないです」とか、「男の子の方がいいでしょ」なんていえないよねって感じで。これでこの企業で私の将来どうなるわけって思ったもんね。

彼の来米のきっかけは女性差別的であり異性愛者であることを当たり前とする日本の企業文化に疑問をもったことだった。彼はその後、海外赴任で日本からカリフォルニアに行くことを命じられたが、その時のことをラッキーだったと振り返った。ユウの移動のきっかけの一つは、異性愛中心性を帯びる日本から逃げることであったのである。

ユウは米国におけるアジア人に対する差別についても物語った。その物語の一部を下に挙げる。

アメリカで人種差別的なことって結構最近まであったわけで。歴史の中で。当然私が生きてる人生の中でも。僕がその差別の対象にあったっていうことはなかったんだけど、色々考えてみると私がアメリカに来るちょっと前までは、普通の白人の人たちが入るバーにアジア系の人たち

はいかなかったりとか。やっとアジア系の人がいけるバーがロサンゼルスにできてみんながいったんだよってというような話を私は聞いたことがあって。私がロサンゼルスに住んでた頃には既にね、二軒か三軒くらいアジア系の人たちが集まるバーがあって。でもね。普通のバーにも入れないことはないんだけどいったってなんとなく、私はこっちで育ったアジア人じゃないのでそういうのって最初は意識がなかったんだけど、ずうっとこっちで生まれ育ってきた人たちは、昔は偏見とか差別とかって。だから普通のバーにいったって孤立しちゃうんだよ。でね、もうはつきりいってね。透明人間になったみたいな感じがするんだって。誰もアジア系に興味がなかったりとか。仮にこっちからアプローチしたってだいたいもうリジェクトされるのはわかってるみたいな。

彼はインタビューの中で、アジア系のゲイたちが自身の問題に対して自身で解決するためのグループを作っていたという歴史や、そのグループに自身も関わっていたことについての物語を丁寧に教えてくれたのだった。

ユウは社会貢献に心を砕いていた。彼の社会貢献は主にゲイの人たちや民族的なマイノリティの人びとを対象としたグループに対して行われているようだった。社会貢献という行為は、米国社会において「成功」を収めた者としての義務的な側面もある。しかし彼による社会貢献は、その行為によってゲイに対するネガティブな印象を払拭するという目的があるように考えられた。

2.3 ヒロシの物語／語り

最後に提示するのはヒロシの物語／語りである。ヒロシの物語／語りはどのように物語るか、という点において他のインタビュー協力者と異なる特徴をもつ。この点に着目しながらヒロシの物語／語りを読んでほしい。

ヒロシは60代のゲイで海沿いの街で美容室を開いていた。ヒロシの職業は他のインタビュー協力者と異なっていた。彼は唯一自営業を営んでいた。

ヒロシを知った方法も他のインタビュー協力者とは異なっていた。私は彼を「日本人」が多く集まる教会で知り合った女性を通して知った。その女性は彼に髪を切ってもらっているようだった。私は彼とメッセージでやり取りを

行ったが、メッセージをやり取りしているうちに彼の面白さについて理解した。彼は自身が映っている写真を私に送ってきた。その写真はおそらく店の宣伝写真のようだった。袴を着て右手を広げた男性と金色の着物を着た女性が笑顔で写真に写り、彼がその前で、右手で身体を支えながら横向きに寝ていた。ベッ甲色の蔓にクリーム色の縁が印象的な眼鏡や薔薇と骸骨、ハートマークにLIVEと書かれたプリントのあるエプロンを着て、左手を顔の位置まで上げ歯をみせながら笑う彼の姿は、まるで教育番組の司会者のようにもみえたし、私がイメージする美容に関する職業に就く「ゲイ」そのものにもみえた。

もう一点、ヒロシが他のインタビュー協力者と異なる点があった。それは彼がユウたちの参加する会に参加していない点だった。ヒロシはあまり「日本人ゲイ」たちと積極的な交流を希望していないようにみえた。私は前述のユウに対して、ヒロシのことを知っているか尋ねたことがあった。ユウはヒロシの存在を知っていたが、彼について積極的に語ろうとはしなかった。両者のあいだには「みえない壁」があるようにさえ思えた。

大きな窓から海を見渡せる美容室で、ヒロシは私の髪を切りながらこれまでの人生について物語った。しかし彼の物語は、ユウとシンヤによる物語とまったく異なっているような印象を受けた。なぜならば彼の語り方は語ることを躊躇うような間や、考えながら話すというような話のスピードの緩急を含んでいなかったからだった。彼は自身の物語を一気に話した。そのあまりに流れるような語り方に、私は彼がその物語を自身の経験から乖離させているような感触すらえた。しかしそれでも彼の物語／語りは面白かった。私の髪を切る鋏がサクサクと調子を取り、私はまるでヒロシによる「小噺」や「演劇」をみているような錯覚をえた。

ヒロシは東京で生まれた。彼の初めての性的な経験は4歳の時に近所の男性とだった。酒乱で薬物中毒だった父親は幼いヒロシに性的ないたづらををした。ヒロシの母親は暴力を振るう父親から逃げるためヒロシと妹を連れて引っ越した。母親は「水商売」の仕事に就いたため、ヒロシは幼い妹の面倒をみて夜を過ごしたと語った。

ヒロシは学生時代女性から「モテた」。しかしヒロシは男性にしか興味がな

かったという。たくさんの男子同級生や先輩、先生とも性的な関係をもったといった。彼は高校生の時、母親に「ゲイ」が読む雑誌をみつけれられてしまったときのことをこのように振り返った。

この雑誌お母ちゃん全部読んじゃった。男の裸は載ってるし男同士の恋愛の話もいっぱい載ってるけど、お前男が好きなのか〔尋ねるように〕。黙っちゃったんだ。やっぱり悪いと思って。そしたらおかあちゃん。私ね、男大好き、って。男なしでは生きていけないわって。その男なしでは生きていけないお母ちゃんの息子が、男が好きなのは不思議じゃないじゃない〔論すように〕 って。

母親はヒロシを自衛隊に勤めるゲイカップルの家へ連れていき、彼は男性を好きになるのが自分だけでないことを知った。彼はその後新宿二丁目の存在を知り通うようにもなった。彼は自衛隊で働く中で、多くの隊員や教官と性的な関係をもったことを自慢げに語った。

自衛隊にいた時はすごい思いっきりモテて。もう人間関係だけでも男関係300人ぐらいとヤった〔性的な行為をした〕のかなあ。だってアタシはもうその頃可愛かったし女性っぽいところもあったし、それでちょっというと「やってくれ」って〔相手は〕ジッパー降ろすからね。それでジッパー降ろしてイット〔射精した〕後、いきなりギルティになるわけだ。「あれー」って「やべえ」って。「俺ゲイじゃないよ」って。だから「わかった。じゃあいいんじゃない。別にもう終わりにしよう」っていうけど、一度味しめちゃうと「頼むよ」ってまた来るの。

自衛隊を辞め美容系の学校に通ったヒロシは、タレントの専属スタイリストとしてテレビ局等で働くことになった。彼はそこで成功を収めた。「思いっきり売れ始めて。それで面白いくらいお金稼げるから。バブルだったし。月300万くらい稼げるから。車もベンツに乗ってイッセイミヤケの服全部買って」。彼は絶頂期の時ドイツ人と知り合った。「自分の人生って一体なんだった

たんだって急にその時思った。このまま死んでしまってゲイを隠していくのであれば未知の世界にいてみようって思ってアメリカにやってきたの」。

私たちは場所を変えヒロシの自宅で話をした。彼の一軒家は丘の中腹にあった。それは彼とパートナーが二人で住むには大きすぎる家のようにみえた。

「私の人生ってものすごく面白くて。すごい不思議なことがやっぱりおきる人だったの昔から」。ヒロシは自衛隊を辞めた後、役者になろうとして借金を作ってしまったこと、借金返済のため男性相手に性的なサービスを行う店で働いたこと、知り合った「ケチな」ドイツ人のボーイフレンドの話など、これまで語らなかったことを語ってくれた。

ヒロシは来米後、ドイツ人のボーイフレンドと一緒にサンフランシスコに住みながら美容学校に通った。しかしボーイフレンドは死んでしまった。彼は遺産をめぐりボーイフレンドの親族と争ったが、ビザの期限切れについて密告されてしまい刑務所に入った。彼が弁護士に刑務所から出る方法を尋ねると、投資ビザの取得をアドバイスされた。彼はビザを得るため美容室を開いた。「大当たり。サンフランシスコで3本指に入るくらい。ビジネスパートナーのエリックがいて。9人スタッフがいて。ボーイフレンドもできて。40代のアタシって全盛期だった」。

「全盛期」だったヒロシに転機が訪れた。ビザの書き換えのために日本に戻った際、更新を拒否されてしまったのだった。彼を米国に呼び戻そうと必死になったのはビジネスパートナーのエリックだった。エリックはヒロシのことが「大好き」だった。しかしエリックはカトリック教徒だったため結婚することはなかったそうだ。ヒロシは米国にいく方法を模索し、九州から来た「サイキック」の「心霊治療」を受けた。

入口に入った瞬間に私気絶しちゃったの。ゲッて。気絶してやっと起き上がって目開けたらね。その教祖様が目の前にいて、帰れるからってその一言。帰れるからって。何もいってないんだよ。質問もしてないし。入り口で倒れちゃったから。帰れるからっていわれて。それでああ帰れるんだって思って。じゃあ私帰るって言ってチケット買って。それで飛行機の中でディナイドされて拒否されたりとかっていうことも全部記入し

て。一か八かで帰ってこようと思って入ってきました。それで弁護士は外で待ってて。普通は強制送還されるんだって。だけど入ってきたらまたまいい人に当たって。「わかった」って「ほんとは君ね、入れないんだけど、君どうも嘘ついてるようにみえないして。どうしてもそのお店の事後処理とかしないといけないから帰ってきたんでしょう。入りなさい」って。それで入れた〔入国できた〕の。

ヒロシは、しばしばこのような人知を超えた力の存在について物語った。彼は美容室の物件や今住んでいる家も「サイキック」への相談の上決めたインタビューで語っていた。

エリックはヒロシの人生において重要な存在だった。米国に再入国した彼はボーイフレンドに別れを告げられてしまった。彼はサンフランシスコの家を売り女性と結婚し永住ビザを取得した。離婚したヒロシはゲイのパートナーをみつけて結婚した。「エリックもうすごい喜んでくれて。エリックがずっと私の面倒みてくれて。もう親みたいにしてくれて」。しかしエリックはパーキンソン病になってしまった。ヒロシは懸命に看病した。

私は毎日彼の家まで介護に通っていて。私はうちの旦那とコンドに住んでたんだけど。もう通うの大変だからエリックに家を売ってっていって。私たちの家も売るから、一緒に住もうっていってこの家を3年前に買ったの。

ヒロシはパートナーとエリックの三人で一緒に住みエリックが亡くなるまで看病したと語った。現在ヒロシはエリックが亡くなり広くなったスペースを人に間貸ししているという。ヒロシはどん底の時必ず誰かが助けてくれること、「カミサマ」は人の形をした人間として現れることを語り、そのために見返りを求めずに人にいろいろなことをしているのだと語った。

3. 物語／語りの分析

本章ではシンヤ、ユウ、ヒロシの物語／語りを分析する。まずシンヤの物語／語りが先行研究により指摘されてきた「日本人ゲイ」に関する物語と多くの点で重なること、シンヤにとっての自身の理想とする物語が規範となりシンヤに影響を与えている点について指摘する。次にユウとヒロシの物語／語りに着目し、ユウとヒロシの物語に観察される両義性や矛盾について分析したい。

3.1 物語／語りにみられる規範

シンヤによって語られた物語／語りは、既存の研究が明らかにしてきた日本における異性愛中心性と、日本社会と米国社会のはざままで試行錯誤しながら生活するゲイについての物語／語りと多分に重なり合う。

シンヤは学生時代に経験した自身の「オカマ」のような話し方に対する揶揄の結果、失語的な状況に追い込まれた自身の経験について物語る。「オカマ」が日本社会においてゲイに対する蔑称として用いられてきた点は、既に多くの史料や文献で指摘されてきた。これらの経験がシンヤの来米のきっかけの一つとなったことが考えられるだろう。

シンヤの今現在日本に帰るかどうか思案しているという語りは、日本社会と米国社会のはざまにいるシンヤの姿を映し出しているといえるだろう。日本は本来学生時代のいじめを受けた経験によりシンヤにとって飛び出したい場所だったはずであるものの、現在は親の介護と「看取り」を理由として帰るべき場所へと変わっている。シンヤがこの相反する話をほぼ続けざまに語っているのが特徴的である。この相反する物語／語りは、シンヤの日本に対する両極な感情とその揺れ動きを表しているように考えられる。

シンヤは日本同様、米国に対しても両極な感情を抱いているように考えられる。シンヤにとって米国は「昔の自分」を取り戻すための目指すべき場所だったはずである。しかし現在のシンヤは米国に対して批判的である。それは私のサンフランシスコ・ベイエリアという研究場所の設定に対する批判や、米国のゲイたちのあいだにみられる親密な関係性の一様式に対する批判から推

測できる。

シンヤが日本に帰りたい理由としてパートナーの不在を挙げている点は着目すべきである。パートナーの話題は他の「日本人ゲイ」たちとの共通の話題となりうる。パートナーがいらないことそれ自体と、パートナーの話を他のゲイと共有できないことは、シンヤが米国に居続ける決意を揺るがせる大きなことがらであるように考えられる。

しかしそれ以上にパートナーの不在が、他者との比較に基づくシンヤ自身の「価値下げ」につながっているのではないか、という点を示唆しておきたい。シンヤはおそらく米国で「本当の自分」を取り戻し、パートナーを作り幸せに暮らすという一つの理想ないし、一つの理想的な物語を有していたのではないだろうか。この理想は、米国での生活における活力ともなりうるが、同時に自らを「縛る」規範ともなりうる。規範化された物語について家族療法を専門とするホワイトとエプストンは「ドミナント・ストーリー」ということばで説明する。ホワイトとエプストンは、「ドミナント・ストーリー」からクライエントを「引き離し」、問題を「外在化」させることによって、「ドミナント・ストーリー」の読みからは導き出されなかった側面を同定」していくことが必要だと述べた(ホワイト&エプストン 2017: 53-57)。

自身の被差別経験やパートナーの不在に関する物語は、シンヤにとって大きなことがらであるように思われる。この物語はシンヤにとって「ドミナント・ストーリー」化しているといえるのではないだろうか。しかしながら本研究は「ドミナント・ストーリー」を発見することが主な目的ではない。本研究はむしろシンヤがどのように語ることを通してその規範と付き合っているのかに着目する。シンヤは日本に帰ることについて「後悔するかなって思うんだ。でも後悔っていう経験をしにいくんだ。しない後悔よりずっといいでしょ」と語る。シンヤのこの語りは、日本への「帰国」の意思を自らの意思として物語ることにより、自身の人生を自らの意思で生きていこうとしていることを自身と他者に示すという意味があるように考えられる。

3.2 「ズラシ」と「外し」

シンヤの物語／語りは日本における異性愛中心性と日本社会と米国社会の

はざまで生活する「日本人ゲイ」に関する語りのあり方を如実に示している。ユウとヒロシの物語／語りにおいてもこのような物語／語りは観察できる。

ユウが語った日本企業における話は直接的な差別とはいえないかもしれないものの、異性愛中心性を指摘するには十分な例である。またバーについての話は、当時の米国における「日本人」・日系の性的マイノリティが置かれていた被差別的状況を映し出すだろう。ヒロシの話は日本から米国に渡った者たちが経験する居住権に関する問題を明らかにする。両者は日本社会と米国社会のはざまで試行錯誤を経て、今の暮らしを手に入れたのだろう。

しかしユウとシンヤの物語／語りの特徴は、むしろ自身をただ単に性的マイノリティ性、人種・民族的マイノリティ性を抱えた被差別的な存在のみとして物語らない点にある。

ユウの物語／語りの特徴は、一方で自身やアジア系ゲイの置かれている「ゲイ難民」的状況について語りながら、他方で自身の「成功」に関する物語や立ち振る舞いを行っている点にある。ユウがアジア系の性的マイノリティのバーにおける話を物語る際、「僕が差別にあったってことはなかったんだけど」や「私はこっちで育ったアジア人じゃないので、最初は意識がなかったんだけど」のように自身の経験そのものとして物語らないようにしていることは印象的である。

すなわちユウは物語／語りや立ち振る舞いを通して、自身を単に性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性という二つのマイノリティ性により抑圧されているという存在から微妙に「ズラシ」た存在として表象しようとしていると考えられないだろうか。この「ズラシ」は、ユウが私に対して二つのマイノリティ性を抱えながら現状の暮らしを勝ち取ったことを誇示するためと考えることもできるし、ユウが自身の経験と他の「日本人ゲイ」や日系人ゲイたちの経験を比較した上で、自身の経験をそこまで大変でなかったと評価しているからとも考えられるだろう。

しかしそれ以上に、ユウが同じ「日本人ゲイ」である私に対して物語っていることがユウの「ズラシ」と関係しているのではないだろうか。ユウは私に対して極めて丁寧な接し、また過去の歴史を丁寧に物語った。ユウは「日本人ゲイ」である私に対して自身を一つの「ロールモデル」として提示しようとした

のではないだろうか。

ヒロシの物語／語りは、物語と語り方という二つの面で矛盾を含んでいるといえるだろう。ヒロシの幼少期の父親からの性的な「虐待」の話や、母親の代わりに妹の世話をする話、米国への突然の入国拒否に関する話などは、極めて「悲惨」な経験とも捉えられる。しかしヒロシはよどみなく話すこと、性的な話を混ぜることなど話し方を工夫することによって、自身の物語を「悲惨」な物語として提示しないようにしていると考察できる。すなわちヒロシは、自身の物語に沿った語りのモードから、あえて「外し」たモードで物語っているように考えられる。

ヒロシの物語／語りにおける「外し」は辛い経験に対する一種の防衛機制的な反応とも考察できるだろうが、私はこの物語／語りのもつ別の意味を考察したい。それはユウが自らを単なる被差別的な存在として表象することに対する「抵抗」としての意味である。ヒロシが「日本人ゲイ」たちのグループに積極的に参加しないのは、被差別的な存在としてしばしば語られる「日本人ゲイ」とは異なった存在として自身を位置付けたいという希望からではないだろうか。

このような実践は人類学者の田中雅一（2010）が述べるような「パヴァート」的振る舞い⁵や、自身がゲイであり評論家である伏見憲明（2004）が述べるような「キャンピィ」的振る舞い⁶、サンフランシスコ・ベイエリアで行われている「ドラッグ」⁷と近い性質をもつだろう。これらに共通していることは被差別的な存在として他者に名づけられたレッテルを自らの表象を通して攪乱することである。ヒロシの物語／語りにみられる「ズレ」は自身の語る実践を通して「日本人ゲイ」に対するイメージを変化させるための「戦略」と考えられる。

ユウとヒロシは「ズラシ」や「外し」などの要素を用いながら物語る。このことから両者は自身の表象について非常に敏感な人物であるように考えられる。自己の表象に対する鋭さは、おそらく米国で生活していくなかで培われた、また培わざるをえなかった「戦略」的要素だと考えられる。これは逆説的に自身がいつも眼差される対象であること、すなわち周縁的な存在であることと無関係ではないように考えられる。

4. 本研究のまとめと限界

本研究は、米国に住む「日本人ゲイ」が性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性をどのように経験してきたのかについて、語る内容のみならず、いかにして物語るかという点への着目に基づく記述により明らかにすることを目的とした。

「日本人ゲイ」により語られる物語には日本でのゲイに対する差別の語りや、異性愛中心的な日本社会についての語り、米国と日本のどちらに住み続けるのかに関する語りを含む。これらの語りは先行研究がこれまで指摘してきた点と多分に重なり合う。米国に住む「日本人ゲイ」は、性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性という二つのマイノリティ性をかかえながら日本社会と米国社会のはざまで試行錯誤しながら生活を営んでいるといえるだろう。

また「日本人ゲイ」たちがいかに物語るのかに着目すると両義性や矛盾も観察できる。これらの物語／語りは語る者にとっての特別な意味や役割をもつように考えられる。それは時に性的マイノリティ性、人種・民族的マイノリティ性をかかえながら日本と米国で生きてきた自身を提示する役割であり、自身を単なる社会における被抑圧的な存在として物語ることに對する「抵抗」としての「戦略」的な役割である。

本研究の限界として三点を提示したい。一つ目は今回の研究が主に一対一のインタビューのみに着目したことである。ゲイたちはしばしば集会などで物語／語りを語り合うことがある。集団での物語／語りの実践になったとき、語られる物語／語りの内容や形式は変化するのだろうか。それはどのように共有されどのような意味をもつのだろうか。この点に着目することは有意義だと考えられる。

二つ目は研究対象をゲイのみに絞ってしまったことである。近年とりわけ米国では性的マイノリティをまとめて捉えようとする動きが顕著にみられる。しかしながら同時に性的マイノリティをひとまとめにできるのか、してよいのか、という批判もみられる。性的マイノリティを研究対象とした場合、ど

のような物語／語りが共有され、どのような物語／語りが共有されないのか、という点に着目することは有意義だろう。

三つ目はいくつかのテーマについての物語／語りについて十分に提示できなかったことがある。その一つは同性婚に関する物語／語りである。本インタビューにおいて同性婚に関する物語／語りはみられたのだが、別稿で詳細に述べたいと考え、今回の主となる記述からあえて外した。もう一つはHIV／エイズに関する物語／語りである。本研究において何人かのインタビュー協力者が、HIV／エイズで亡くなった知り合いの話についての片鱗を語った。しかし私は、語ることがインタビュー協力者にとっての辛い経験を想起するきっかけになるのではないかと危惧し、深く聞くことを避けてしまった。HIV／エイズの問題は米国に住むゲイにとって大きな影響を与えた問題でもあり「日本人ゲイ」にとっても大きな影響を与えている可能性が高い。この点に着目することを今後の課題としたい。

謝辞

本研究は「平成30年度大阪大学未来戦略機構第五部門 独創的教育研究活動経費」、「2019年度大阪大学人間科学研究科教育改革推進室 学部生・大学院生等による国際研究交流プロジェクト」による助成を受けた。また本研究の長期的調査は、カリフォルニア州立大学バークレー校人類学部からの訪問学生研究員としての受け入れにより可能となった。本研究でインタビューを受けてくださった方、ご指導・ご助言をくださった方、関わってくださった全ての方に感謝を申し上げます。

注

- 1 サンフランシスコ市の家賃は2021年3月現在、1ベッドルームの部屋の中央値が2650USドルと全米で最も高い(Gerstein 2021)。
- 2 アジア人という人種の定義自体が非常に曖昧である点を指摘しておきたい。またネイティブハワイアンもしくは太平洋諸島地域もひとまとめにされている。この点に個別性をひとつくりにしてしまう暴力性や彼らの周縁性について指摘できる。
- 3 人種割合のパーセンテージが全体で100%を超えるのは、国勢調査の方法が人種を自己認識に基づくものとして捉え、一つ以上の選択肢を選ぶことを認めているからである。オークランド市の人種割合のパーセンテージも同様である。

- 4 サンフランシスコの例ではないものの、これらの活動の一例としてエイミー・スエヨシ、スタン・ヨギ企画、花房吾早子和訳のJ-Seiによる性的マイノリティ性をもつ日系米国人達の歴史を取り上げたオンライン企画展『明界と幽界』がある。企画展は日本から米国に渡った同性愛や異性装に対して比較的寛容だった日系人たちが、1930年以降次第に同性愛を逸脱したものとして捉えるようになっていく歴史の変遷を描いている(J-Sei 2020)。
- 5 「パヴァート」のもつ可能性については田中が論じている。田中は1972年のルー・リードによる「ワイルド・サイドを歩け」という曲を引用し、「裏街道」=「ワイルド・サイド」を「性的存在としての人間」=「パヴァート」がいる場所や場面と定義付ける。「パヴァート」について田中はクィア概念と近いと言及しながら、「パヴァート」のもつ「支配される側(マイノリティ)が支配する側の世界を攪乱し揺るがす力」について指摘する(田中 2010: 215-218)。
- 6 伏見憲明は、論考集『ゲイという経験』(2004)の「キャンピー感覚」(このエッセイ集は単独で書籍化もされている)というエッセイ集の部分において「キャンピー」的な生き方について「キャンピー」的な書き方を実践することを通して提示した。伏見は「自己紹介のキャンピー」という小節の中で、依存症の人たちが集まるイベントに参加した際に自分史を語ったことを述べる。伏見は自身のマイノリティとしてのストーリーについて笑いを入れながら語ったという。「考えてみれば、その時会場に集まっていたのは、アディクションをもった連中やゲイやレズビアン、その他諸々のハズレモノばかりだった。そんな中でひとり暗くなったって、誰も同情してくれないもんね。お互いの傷をなめ合うというよりは、傷口に塩を塗りたいくる遊びを楽しんでしまう方がずっといい。…中略…だから、出会いの場で求められる自己表現のキャンピーは、自分の商品価値や自信を伝えることなく、弱点をウリにさえてできる茶目っ気なのだ。弱さを共有していることがベースになっているつながりならば、意味のない嫉妬や競争心を持たずにお互いを尊重できるし、プラスの面をより認められる。なによりも関係の中で自然体の自分であることが許される(伏見 2004:511)」。ヒロシの語り方は、伏見のいう「キャンピー」的な振る舞いと多分に重なり合うだろう。
- 7 パフォーマンスビディの一例としての「ドラッグ」に着目したのがジュディス・バトラーである(Butler 1993)。サンフランシスコ・ベイエリアにおいても「ドラッグ」な実践は様々な場所で観察される。その一つがThe sisters of Perpetual Indulgenceの実践である。この団体は1979年に始まった(The sisters of Perpetual Indulgence n.a.)。団体の特徴はシスターの格好をし、派手な白塗りの化粧に髭を生やしているメンバーたちの姿にある。彼らはボランティア活動やファンドレイジングに積極的に参加し、祭りやイベントに参加するなかで観客を楽しませる(The sisters of Perpetual Indulgence n.a.)。この実践は、ゲイに対して批判的なキリスト教を揶揄する取り組みであると同時に、男性と女性という二分法をあやふやにさせゲイたちの社会的なイメージを塗り替える戦略的取り組みともいえるだろう。

参考文献

日本語文献

田中雅一

2010 『癒しとイヤラシ エロスの文化人類学』東京：筑摩書房。

バトラー、ジュディス

1999 『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、東京：青土社。

伏見憲明

2004 『ゲイという〔経験〕増補版』東京：ポット社。

プラマー、ケン

1998 『セクシュアル・ストーリーの時代 語りのポリティクス』桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳、東京：新曜社。

ホワイト、マイケル&エプストン、デイヴィッド

2017 『物語としての家族 新訳版』小森康永訳、東京：金剛出版。

森山至貴

2017 『LGBTを読み解く クィア・スタディーズ入門』東京：筑摩書房。

英語文献

Butler, Judith

1993 Critically queer. *GLQ*, 1(1), pp.17-32.

Eguchi, Shinsuke

2011 Cross-national identity transformation: Becoming a gay 'Asian-American' man. *Sexuality & Culture*, 15, pp.19-40.

2014 Ongoing cross-national identity transformation: Living on the queer Japan-U.S. transnational borderland. *Sexuality & Culture*, 18, pp.977-993.

Han, Cs

2015 *Geisha of a different kind: Race and sexuality in Gaysian America*. New York: New York University Press.

Han, Cs. Proctor, K. & Choi, KH

2014 I know a lot of gay Asian men who are actually tops: Managing and negotiating gay racial stigma. *Sexuality & Culture*, 18, pp.219-234.

Hanafusa, Asako

2020 *Queer dreams versus reality for Japanese migrants to the U.S.* [Unpublished master's thesis]. San Francisco State University.

Hirano, Kunisuke

2014 In search of dreams: Narratives of Japanese gay men on migration to the United States. Campos, M S., Goh, J.N. and Quero, H.C. (eds.) *Queering Migrations Towards, From, and Beyond Asia*. pp.77-97. Palgrave Macmillan.

Strayhorn, T.L. & Tillman-Kelly, D.L

- 2013 Queering masculinity: Manhood and black gay men in college. *Spectrum: A Journal on Black Men*, 1(2), pp.83-110.

Tamagawa, Masami

- 2020 *Japanese LGBT diasporas -Gender, immigration policy and diverse experiences*. Palgrave Pivot.

Web サイト

Gerstein, Neil

- 2021 *Zumper National Rent Report: March 2021*. <https://www.zumper.com/blog/rental-price-data/> (2021/2/26 アクセス)

J-Sei

- 2020 「明界と幽界」 <https://www.seenandunseen.net/japanese> (2021/2/28 アクセス)

The sisters of Perpetual Indulgence

- n.a. *Sistory*. <https://www.thesisters.org/sistory> (2020/10/28 アクセス)
n.a. *What it takes to be a Sister of Perpetual Indulgence*. <https://www.thesisters.org/become-a-nun> (2021/2/26 アクセス)

Sueyoshi, Amy

- 2016 Breathing Fire: Remembering Asian Pacific Islander Activism in Queer History. Springate, Megan E(eds.). *LGBTQ America: A Theme Study of Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, and Queer History*. Chapter11. Washington, D.C.: National Park Foundation. <https://www.nps.gov/subjects/tellingallamericansstories/lgbtqthemestudy.htm>. (2021/3/6 アクセス)

United State Census Bureau

- 2019a *QuickFacts San Francisco city, California*. <https://www.census.gov/quickfacts/fact/table/sanfranciscocitycalifornia/PST045219> (2021/2/26 アクセス)
2019b *QuickFacts Oakland city, California*. <https://www.census.gov/quickfacts/oaklandcitycalifornia> (2021/2/26 アクセス)

A study on narratives by “Japanese gays” living in the U.S.: How do they represent sexual minority-ness and racial/ethnic minority-ness in their narratives?

Hiroyuki TOMIYASU

Abstract

Previous studies on “Japanese gays” living in the United States have illustrated the intersectional problems of sexuality and race/ethnicity leading to discrimination and oppression. These problems appear in complexity in their narratives. The purpose of this study is to examine how “Japanese gays” represent sexual minority-ness and racial/ethnic minority-ness through their respective narratives, and to explore what these various narratives mean for them. The researcher conducted fieldwork in 2018 and 2019 for over eight months in San Francisco Bay Area, California, in addition to various interviews with 8 “Japanese gay” participants between the ages of 30s to 60s years old. Most of them are married or previously married to a same-sex partner.

In this article, we can examine three narratives on heterosexism; dealing with a childhood bullying experience in Japan, Japanese workplace heterosexism, and uncertainty on whether to stay in the United States or go back to Japan. As previous studies pointed out, these narratives substantially confirm some of the “Japanese gays” intersectional problems related to sex and race/ethnicity, especially when one focuses on their sexual or racial/ethnic minority-ness. However, these stories sometimes work as norms.

Furthermore, the narratives also contain ambivalence and contradictions. For example, one interviewee tried to present his image as successful in life, but explaining socially discriminated. The other interviewee narrated harsh stories about his childhood cheerfully. This study analyzed the meaning of such ambivalence or contradiction in the respective narrative, which I call “zurashi” (shifting) or “hazushi” (out of tune). The researcher pointed out that these elements relate self-representation.

Keywords : Gay, Japanese living in the United States, narratives, minorities